2025.10.13　No.94

文教大学の授業

文教大学教育研究所
埼玉県越谷市南荻島3337
℡ 048-974-8811 〒343-8511

ゼミナールⅠ・Ⅱ
多様な仲間との協働、挑戦を通じて、ともに成長する

経営学部　　首藤　洋志

情熱的かつ社交的で、好奇心旺盛な九州育ち。2011年に大学院を卒業後、公認会計士としてキャリアをスタート。2020年に文教大学経営学部に着任し、会計・監査関連科目やプレゼンテーションを中心に担当。研究テーマは監査×財務会計。近年、国際的な監査法人（監査を中心としたサービスをグローバルに提供するプロフェッショナル・ファーム）を対象とした「ダイバーシティ」、「サステナビリティ」及び「パーパス」経営に関心をもつ。

（しゅとう　ひろし）

学生は、大学教育にどのような希望を抱いているのだろうか？また、社会（企業）は、大学を卒業する学生に、どのような期待をもっているのだろうか？学生のニーズをイメージした学問及び人間的な成長のための機会と、ビジネス・パーソンが求めるソフトスキル（例：コミュニケーション能力、思考力、及び人間力）の向上が期待できる環境と文化について考えてみたい。

以下では、私が担当するゼミナール（ゼミ）Ⅰ・Ⅱ（以下、総称して「本授業」という）を題材として、大学教育歴よりもビジネス・パーソンとしての社会人歴の方が長い私が、学生を前にして日々考え、実践している取組みについて紹介する。

｜“ビジネスの共通言語”と呼ばれる“会計”

本授業では、会計学（とりわけ、財務会計）を主要な研究テーマとして位置づけながら、経営学、社会学及び心理学の領域等も踏まえた、学際的（複数の学問領域横断的）な研究活動に取り組んでいる。実学とされる会計は、（営利目的の）ビジネスシーンにおいて、部署や仕事内容にかかわらず、よく話題にあがる。なぜならビジネスでは、簡単に言えば、利益（＝収益―費用）を生み出すことが重要な目的の一つであり、その目的に照らせば、ビジネスの話をする際に、お金（≒会計）の話は避けて通れないからである。このような理由から、“会計”はよく、“ビジネスの共通言語”と呼ばれる。

経営学部では、会計の基礎的なスキルを身に着けるべく、「基礎簿記演習」（日商簿記検定試験3級レベルの簿記）が必修科目とされている。本授業を履修する学生たちの多くは、「基礎簿記演習」に加えて、他の会計関連科目を2年次までに一通り履修しており、本授業では（財務）会計のスキルをさらに発展的に活用することになる。具体的には、実存する上場企業（Apple等の海外企業も含む）の財務諸表を、定量・定性的に分析する作業を通じて、「企業経営」における財務成果や未来志向の戦略を、「会計的な側面から捉える」トレーニングを行っている。このような実践により、ビジネス感覚の涵養が期待される。

｜仲間、そして社会人（未知）との出会い

本授業では、先輩、同期及び後輩の垣根を超えた〝対話〟と〝協働〟を大切にしている。基本的に、ゼミⅠ（3年生）とゼミⅡ（4年

生）に分けて授業を実施するが、両学年の協働企画も多数計画される。ここでは、ゼミⅠ・Ⅱの〝協働〟企画として開催される「コラボゼミ」と「ゲストゼミ」を取り上げてみよう。

① コラボゼミ

コラボゼミのポイントは、授業内容の企画から運営まで、すべて学生が主体的に行うところである。年4回開催されるコラボゼミでは、3年生と4年生がそれぞれ2回ずつ企画担当を務める。コラボゼミの企画・運営に関する私からのオーダーは、「学びと親睦の双方を深められる、有意義な機会にすること」。学生たちは、およそ1ヶ月程度の時間をかけてコラボゼミの企画・準備を行う。この過程で、プロジェクトマネジメント、マイルストーン管理、チームにおけるタスク分担といった、社会人的重要スキルに触れ、〝協働〟することの奥深さを体感することが期待される。

② ゲストゼミ

本授業では、年2回、社会人ゲスト（公認会計士を中心としたビジネス・パーソン）を、数名お招きしている。ゲストゼミの目的は、「オープンな世代間コミュニケーションの実践」、「社会人的思考、立ち居振る舞い及び素養の修得」及び「ビジネス・マナーと礼儀作法の意識と実践」である。学生によるプレゼン（読書プレゼン・研究発表）に対するフィードバックやディスカッションに加えて、ゲストの価値観や仕事の流儀に触れるための〝対話〟企画が催される。ゼミ後に開催される有志による懇親会まで含めて、学生が主体的に企画から運営（幹事）を務めることで、様々な気づきや発見、学びの機会を得ることができる。

｜実践、失敗、そして気づき

華叉祭への出店も、本授業にとっての重要な取組みの1つである。この取組みは、学生たちがゼミで学ぶ会計スキル（財務会計［利益計算と財務報告］＋管理会計［原価計算］）の実践を可能にするのみならず、経営学（例：どのようにお店をマネジメントするか？）や、マーケティング（例：どのように商品を売るか／マーケットを創出するか？）を実践する貴重な実践の場ともなる。学生たちは、過去の経験や失敗を活かし、華叉祭の参加者に喜んでもらうと同時に、前年の儲け（利益）を上回る成果の達成に意気込んでいる。余談だが、学生主体で、年数回の懇親会や、夏合宿・登山などのキャンパス外イベントも頻繁に企画されている。私が強制するイベントは1つもないが、毎年恒例のイベントとして、幹事を中心に、準備段階からみんなで楽しみながら盛り上がっているようである。

｜挑戦が飛躍的な成長を後押し

私にとって、最も重要な責務は、学生の「未来志向の成長意欲（モチベーション）を掻き立てることにより、失敗を恐れず挑戦し続けるための機会を用意すること」、そして、学生の「学問的探究心(情熱)に火をつけることにより、〝いま〟に熱中できる環境と文化を生み出すこと」にある。本授業にとっての最も重要な〝挑戦の機会〟は、International Joint Seminarへの参加である。このセミナーでは、日本と韓国の大学約10校が集まり、英語でビジネスプレゼンやディスカッションを行う。さらに、ツアー企画などを通して、日韓の学生同志が（拙い英語を駆使した）異文化交流を実践する機会も提供される。

およそ半年以上の準備期間をもって、慣れない英語で100名以上の参加者を前にプレゼンをする経験を積んだ学生は、例年〝飛躍的な成長〟を遂げるのみならず、自ら新しい挑戦の機会を求めるようになる。学生たちの、大舞台における覚悟の決まった表情や、挑戦を乗り越えた先の清々しい笑顔については、ぜひ、経営学部HPの参加体験記もご覧いただきたい。(https://www.bunkyo.ac.jp/faculty/business/news/2025/02/044146)

“多様な仲間との協働、挑戦を通じて、ともに成長する”学生たちのストーリーを、一番近いところで観られることこそ、教育者としての私の一番の喜びといえるだろう。次は、どのような挑戦（失敗）や成長を魅せてくれるのだろうか？